

は、唐土は六町一里といひけん故にかく記したるならん。又平家物語瀬尾期條に備前國福隆寺繩

手は、はたばり弓杖一枚ばかりにて、遠さは西國道の一里也とあるも、三十六町一里なるべし。長門本平家物語に、兵庫島のこはたよりおきへ一里三十六町出してぞつき出したりけるといひ、沙石集に、高野の大塔は不二の總體なり、それより改所へ五り百八十町に彌勒の御座は云々といへるは、一里と三十六町五里と百八十町には非ず、三十六町を一里とし、百八十町を五里是六十町の里なりと云ふを玄らせたるなり。梅松論に、建武三年三月二日、筑前の道を記したるも、又此定めなり。又東國の里程は、吾妻鏡に、文治五年九月十一日、今朝令立陳岡給自是厨川棚者、依爲廿五里行程、未屬黃昏著御件館とあるは、陸奥の事なり。虎關の濟北集に、正和壬子四月十二日、相之海水變赤、西自豆駿東距武總沿海濱三百餘里、朱瀾丹濤注々然也。最須敬重繪詞に、如信上人ハ、奥州大綱東山トイフ所ニ、乘善坊トイフ人アリナドイヘルハ、皆六町一里ナルベシ。此後廻國雜記、梅花無盡藏、宗長手記、河越記テ金澤トイフ所ニ、乘善坊トイフ人アリナドイヘルハ、皆六町一里ナルベシ。此定也。又語林類葉に引たる外にも、太平記に三十六町を一里といひたるは、第五卷に切目王子より十津河迄を三十餘里といひ、七卷に麻耶より京迄を二十里といひ、十一に書寫山より比叡山までを三十五里といひ、兵庫より京までを十八里といひ、十八に山路八里といひ、廿一に、京より湊川までを十八里といひ、流布本八里とは誤なり廿九に、湊川より賀久川迄を十六里といひ、廿五に、楠が館へ七里といひ、廿九に、七里半の山中といひ、三十八に、白峯と歌津と其あはひ二里といへるなどは、皆三十六町一里なり。又同書に、六町一里をいへるは、十卷に四方八百里に餘れる武藏野といひ、三十一に、小手差原より石濱まで、坂東道四十六里といひ、三十九に、宇都宮より武藏國迄を坂東道八十里といへるなど、みな六町一里なり。十卷に、義貞三里引退て、入間川に陣をとる、鎌倉陣相去其間を見渡せば、三十餘町に足ざりけりとあり、此文を見ては、六里を三十餘町にたらすといふごとく思はるれども、あゆみては、三十六町あれば六里なれども、さしわたりには三十餘